



教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

東浦町SP通信

～東浦町では、学生ボランティアを“職員の仲間”という思いを込めて、
「SP」または「スクールパートナー」と呼んでいます。～

第 42 号

2021 年 12 月 28 日

編集 緒方 なな
東浦町教育委員会
SPコーディネーター

「わくわく算数教室」3日目

12月28日、「2021冬休みわくわく算数教室」も折り返し地点です。密度の濃い時間というのはあっという間に過ぎるものですね。今年はコロナウイルスの影響もあるのか、今日まで講義があるという大学がほとんどという状況でした。加えて年末です。そんな中、40名ほどのSPさんが集まってくれました。有り難いのと同時に、これほどたくさんの“現場で学びたい”という意欲のある学生さんがいることに驚きです。東浦町には、意欲と意識の高い学生さんが集まってくれているのです。児童も午前午後合わせて100名ほどが参加しました。真冬でとても寒い時期ですが、東浦町は、片葩小は、ものすごい熱気に包まれています。

今日の「わくわく算数教室」も大盛況でした。子どもたちが、いい顔で、楽しそうに算数に取り組む姿が最高でした。下の写真は算数教室が始まる前の光景です。SPさんは、朝の打ち合わせを終えると、三つの場所にそれぞれ移動をします。一つ目は、昇降口です。児童を出迎えます。寒い寒い朝、子どもたちは歩いて登校してきます。そんな子どもたちをSPさんは元気に、笑顔で出迎えてくれます。しかも、その子どもたちを見る視線がとても温かいのです。低学年の子どもたちは安心することでしょう。中学年や高学年の児童になると、知っているSPさんを見つけると嬉しそうに話し始めます。教室開催前のホッとする一コマです。二つ目は、受付です。算数教室の会場前で受付をします。参加票を提出して、手指消毒をします。現場に出て、教師が行うことをSPさんはわく算で経験します。一度受付をすると、どんな準備が必要かも見えてくるでしょう。三つ目は、会場での誘導などです。算数教室の会場である「なかよし音楽広場」に入ると、すぐにSPさんが子どもたちのそばに来てくれます。そして、かがんで目を合わせて、自席に誘導してくれます。「わくわく算数教室」はSPさんも児童も指定席です。今回は、学生実行委員会(=スピリット)がこの座席表を作ってくれています。これがスムーズな算数教室開催には欠かせません。そして着席すると、手の空いているSPさんが「サンタさん来た?」「今日寒かったね」「この帽子、かわいいね!」などと話しかけてくれます。心細い待ち時間に、SPさんの“雑談力”が光ります。こういった些細な何気ない瞬間の積み重ねで、子どもとの信頼関係ができていきます。きっとSPさんたちはすでにその大切さに気がついているのでしょう。この三つの分担作業は、SPさん同士が様子を見て、臨機応変に動いてくれています。これができるのが東浦町に来てくれるSPさんなのです。9年目を迎えた「わくわく算数教室」、初期から続くこの三つの仕事が、脈々と繋がられています。そして、「わくわく算数教室」を支えてくれています。



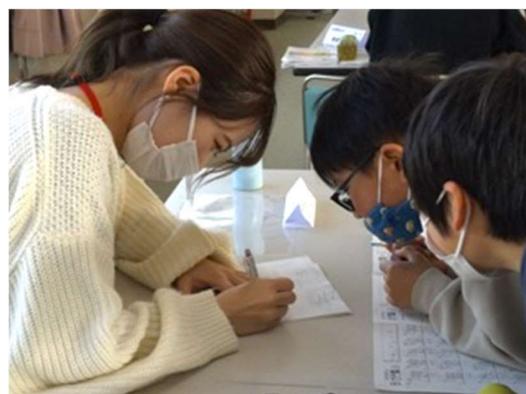
午前の部の司会は、スピリットメンバーの二澤S Pが行いました。現在大学2年生。実習も未経験な中、100名ほどの前で話すことはとても緊張したことでしょう。普通ならこんなに緊張することはやりたくないでしょうが、二澤S Pは果敢に挑戦しました。二澤S Pらしく、元気な司会で算数教室が始まりました。午後の部の司会は、スピリットメンバーの相澤S Pが行いました。本当に初めての司会？と思うほどレベルの高い司会でした。番号をつけて説明をしたり、一文を簡潔に区切ったりなど、教師が使うテクニックがいくつも入っていました。二人のS Pさん自身では、それぞれに反省点があったことと思いますが、今回こうして“大勢の前で話す”という経験に挑戦したからこそ、得られた反省だと思えます。二人とも「何を話そうか」「どんな風に伝えようか」、きっと事前に準備をしたことでしょう。準備を万全にしている、なかなか話し手の思い通りにはいかないものですが、こうした準備・経験・反省を繰り返すことで、話し方が洗練されていくはず。どんな準備をして、どんな反省をするかで、ものの見え方も変わってきます。S Pさんの高い意欲と熱意で、これからもたくさんの経験をこの「わくわく算数教室」でもらえたらと思えます。「失敗しても大丈夫」中村先生のこのお言葉は、皆さんへのエールです。これからも果敢にいろいろなことにチャレンジしてください。



←低学年でも、今日自分がやるプリントを自分で選びます。S Pさんと一緒にだから、楽しく選べます。S Pさんと一緒にだから、少し難しい問題や苦手な問題も「チャレンジしてみよう」と思えます。子どもの“主体的に学ぶ姿”がわくわく算数教室にはあります。

千葉S P、どんなことを書いているのでしょうか。子どもたちは釘付けです。ここまで前のめりになって、算数をしているのです。「なるほど」と思うと、「聞いてみよう」と思うと、

子どもたちはこんなに真剣に学びに向かうのですね。→



←S Pさんは、徹底的に待ってくれます。「言った方が早い」「説明した方が早い」と思っても、ジッと待ってくれます。大人は「待つ」ことが苦手です。子どもたちの頭の中はフル回転。待ってくれるから、ひらめきます。自分でひらめいたことは忘れません。自分の“もの”になります。普段の授業ではなかなかここまで待ってもらえません。家でも、ここまでじっくり待ってもらえることは少ないかもしれません。「待つ」ことも立派な支援・指導です。この丁寧で手厚い時間プラス S Pさんの優しい空気と視線が、子どもたちの安心な空間に繋がっています。だからこそ、笑顔の多い、「わくわくする」算数教室になっているのでしょう。

